

## 『同志少女よ 敵を撃て』

2022年04月25日

逢坂冬馬氏の『同志少女よ 敵を撃て』は、本屋大賞、アガサ・クリスティー賞を受賞した。ドイツ・ナチズムを敗北に追い込んだ独ソ戦をテーマに、ソ連の女性狙撃兵の壮烈な戦いを描いた小説である。現在、ロシアのウクライナ侵攻が起きている時だから、関心を持たれ、多くの人に読まれているらしい。独ソ戦の歴史を踏まえ、兵器の扱いも詳しく描かれている。戦争の残酷さ、非情さを前面に著し、忍耐なくしては読めない小説であった。

独ソ戦が激化し、少女セラフィマが暮らすモスクワ近郊の農村に、突然現れたドイツ軍によって、母親や村人たちが惨殺された。その後、赤軍（ソ連兵）が急襲し、ドイツ兵を殺害する。赤軍は、惨殺された村人や家の痕跡を消すために焼き払う。セラフィマは母を焼かれたことに怒り狂うが、剛腕の赤軍の女性兵士イリーナに「戦いたいのか、死にたいのか」と問われ、祖国と女性を守るために戦うことを選び、イリーナが教官を務める訓練学校で過酷な訓練を受ける。この時、母を撃ったドイツ人と、母の遺体を焼き払った赤軍の指導者イリーナに復讐する決意を固めていた。同じ境遇で家族を失い、戦うことを選んだ女性狙撃兵たちとともに訓練を重ね、一流の狙撃兵になっていく。そして、独ソ戦の渦中に置かれる。様々な戦闘を経験し、決定的な転換点となるスターリングラードの前線へと向かう。そこでは、おびたしい死と目を覆う暴虐な戦争が展開されている。

現在、ロシアがウクライナを侵攻しているが、本書は、ソ連がドイツの侵攻を防ぎ、攻め入る真逆なストーリーである。女性狙撃兵たちは、訓練を受けた親しい仲間で構成された、小人数の小隊である。しかし、仲間が銃撃されて死ぬ。セラフィマは、「アヤ（仲間の女性狙撃兵）は死んだ。彼女のスコア（狙撃した人数）が伸びることはない。故に優れた狙撃兵として記憶されることもなければ、故郷に帰ることもない。彼女が会うはずだった人間と会うことなく、子を産み、育てることもなければ、孫が生まれることもない。無だ。それが死だ。お前たちは彼女を悼み、彼女の分も戦うのだ」と悲しむ。現在、ウクライナで、同じように、死者が積み上げられ、若いロシア兵も命を落としている。

ドイツ兵を愛するロシア女性がいる。傷ついたドイツ人少年を助けようとして、銃撃された女性狙撃兵がいる。入り乱れての戦いである。「被害者と加害者。敵と味方。自分とフリッツ（＝ドイツ兵）。ソ連とドイツ。それらは全て同じだと、セラフィマは疑うことなく信じていた。だが、もしもこれらが揺らぎうるならば。もしもソ連兵士として戦うことと、女性を救うことが一致しないときが来たのなら。ソ連兵士として戦い、女性を救うことを目標としている自分は、そのときどう行動すればよいのだろう」と主人公の心は揺らいでいる。彼女は戦禍の中にあっても、冷めた良心を宿している。

アレクシェーヴィチは『戦争は女の顔をしていない』を著している。独ソ戦では百万もの女性兵士が動員されている。戦勝後、セラフィマは殺害しようと思っていたイリーナと共に故郷の村に帰って来るが、100人を狙撃した女性として恐れられ、寂しい生涯を送る。これは、著者・逢坂氏の視点であろう。200人ほどを狙撃した米国の伝説の狙撃手・クリス・カイルは、帰国後、精神を病み、非業の最後を遂げている。

ソ連軍は、死闘のスターリングラード戦に勝利し、ベルリンに攻め入り、陥落させて勝利した。犠牲者は2700万人と言われている。ベルリンに入ったソ連兵はドイツ人女性を凌辱し、多くの自殺者を出した。戦勝国は戦争犯罪を不問にされる。戦争は不条理を生み、取り返しのつかない惨劇をもたらす。この事実を本書は訴えている。